

もっともっと Beijing Opera ～京劇を軸とした日中交流～

4年

○研究の概要

中国には、伝統演劇の代表として京劇が存在する。しかし、日本での京劇の知名度はあまりにも低い。この問題の解決をめざし、日本における京劇の普及を目指すこととする。日本人に京劇を広める方法を考えた結果、4つの方法を考えた。

まず、日本における京劇公演の追加である。来日公演を行うことは難しいが、私は新潮劇院の公演回数の増加を提案する。次に、SNS等インターネット上での露出の増加である。このことは日本人が京劇に触れる機会を増やす良い方法であるといえる。3つ目は日本文化とのコラボレーションである。京劇と歌舞伎、能、和楽器といった日本の伝統芸能とコラボレーションすることで、日本文化に興味がある人が京劇を知ることができる。最後に、学校への巡回公演である。すでに行われ、結果が良好だったものであるからだ。これらにより日本での京劇普及は達成されると考えた。

1 研究の目的

中国には、伝統演劇の代表として京劇が存在する。私は京劇が好きで、インターネット上ではあるが、毎日のように観劇しその美しさに魅せられている。しかし、日本での京劇の知名度はあまりにも低い。口頭で「京劇」といえば「狂言」と勘違いされ、字で「京劇」と書けば京都の劇かと思われる。このことは私を強く失望させ、日本に京劇を広めたいという思いを一層強くさせた。

そこで、以下の三つを目的として設定した。

I、日本における京劇の普及

日本における京劇の普及を目指す。具体的には、日本人が口頭で「きょうげき」と聞いて「京劇」と変換されるくらい、あるいは「京劇」という字に対して「ああ、中国の劇ね」と思われるくらいの普及を目指す。もちろん最終的には日本の歌舞伎や能、西洋のオペラの様々に知名度を高めたい。

II、異文化の理解

京劇は中国人とともに育ってきた（5、京劇とは を参照）文化である。そこには中国の風俗、伝統、当時の中国人の考え方などが色濃く反映されている。京劇を理解することはそれすなわち異文化である中国文化を理解することであるといつて過言ではないと思う。

III、日中関係改善

現在日中の関係は、尖閣諸島などの問題を考えても「良好」とは言いにくいことは周知の事実である。しかし、例えば2017年という年は日中国交正常化45周年にあたる年であるという（1972年の日中共同声明を基準とする）。この状況を打開するきっかけに京劇が成れば良いと思う。ただし、私が目指すのは政治的問題の解決ではなく、俗的な言い方をするならば、「京劇による中国のイメージアップ」のようなものである。

2 研究の方法

- ・書籍（7 参考文献参照）
- ・インターネット（7 参考文献参照）
- ・実地調査 ○天津京劇団来日公演「楊門女将」

上記の方法で情報を集めたのち、現状と自分の考察により目的達成を目指した。

3 研究の成果と課題

一、京劇とは

京劇の起源は様々な説があるが、加藤徹明治大学教授のホームページである「京劇城 京劇の歴史と特徴 (<http://www.geocities.jp/cato1963/KGHistory.html>)」によると

- ・乾隆二十五年（一七六〇年）「四大徽班」の北京入城
- ・乾隆五十五年（一七九〇年）、高宗乾隆帝の八十歳の誕生祝いのため徽班が北京に呼ばれ

た年

- ・道光八年から十二年（一八二八～三二年）にかけて、楚調（漢劇）の俳優・王洪貴、李六らが北京に進出し、徽班に影響を与えたとき
- ・道光二十年（一八四〇年）頃から咸豊末年（一八六一年）にかけて、俳優の出身地や使用方言などで、徽班の「北京化」が進んだ時期
- ・光緒の中葉から末葉（二十世紀初頭）

の5つが掲げられている。しかし、これらの正否を明確に分けるものはなく、同サイト内でも教授は

「結局、京劇の発生が何年からかを決定するのは、一本の川を上流・中流・下流に区分けするのにも似た難しさがある。各説にはそれぞれ根拠とするとところがあり、一概に退ける訳にはいかない。」（<http://www.geocities.jp/cato1963/KGHistory.html> より引用）

とのべている。

いずれにしても京劇は清末に形成されていったようである。

この時期、「道光時代三鼎甲」或いは「京劇三鼎甲」と呼ばれる三人の役者、すなわち程長庚、張二奎、余三勝が活躍した。いずれも元は京劇が完成する以前の時代の人であることから京劇出身ではないが、崑曲などを得意とし、京劇の形成に一役を買った人物たちである。

その後、清の同治帝、光緒帝の治世において、同光十三絶、すなわち郝蘭田、張勝奎、梅巧玲、劉趕三、余紫雲、程長庚、徐小香、時小福、盧勝奎、朱蓮芬、譚鑫培、楊月樓の十三人が、当時の代表的な役者たちとして清代の画家の沈蓉圃によって描かれた。この中でも、程長庚が扮している魯肅や徐小香が扮している周瑜の「群英会」、楊月樓が扮している楊延輝の「四朗探母」などは今でも人気の京劇演目であり、この時期には京劇が大衆の心をつかみ、ある程度人気を持った完成に近い芸能であったと思われる。

清末から中華民国期に京劇は最盛期を迎える。このころ「四大名旦」である梅蘭芳、程硯秋、尚小雲、荀慧生らがそれぞれ京劇の表演様式に工夫を凝らし、京劇は大変な発展を遂げた。また、それらに加えて、「四大須生」と呼ばれた馬連良、余叔岩、高慶奎、言菊朋、譚富英、楊宝森、奚嘯伯（四大須生は時期により選出された4人が異なる）や「四小名旦」と呼ばれた李世芳、毛世来、張君秋、宋徳珠や、孫菊仙、楊小樓、王瑤卿、金少山、裘盛戎、葉盛蘭、周信芳（麒麟童）、孟小冬、蓋叫天、袁世海、李少春、李多奎、姜妙香、蕭長華らは大人気を博し、多くが流派を持ったほか、現在も人気である演目が多く作られた。梅蘭芳は何度か来日公演を行い、そのたび「京劇ブーム」を起こしたという。

しかし、文化大革命期の退歩も著しい。そもそも文化大革命の引き金自体が京劇である。1965年11月10日、当時を代表する老生役者である馬連良が作家の呉晗に依頼して作られた京劇「海瑞罷官」が、上海の「文匯報」にて、姚文元により「内容が政治を非難するものである」と評価され、その後毛沢東は「彭徳懐の罷免を批判するものである」と批判した。この後共産党員たちにより次第に文化大革命の基盤が作られていった。

文化大革命中、「京劇は古い伝統である」として紅衛兵などから批判の対象とされた。男旦育成は禁止され、役者は自己批判を強要され、衣装は燃やされ、京劇は壊された。映画「霸王別姫（邦題『さらば、わが愛 霸王別姫』）」の中でも、京劇役者である主人公の程蝶衣らが民衆から自己批判を強要される場面がみられる。

演目は「封建的である」「古い伝統だ」として批判され、ついには上演が禁止された。その混乱の中、荀慧生や李少春、蓋叫天といった名優たちは批判にさらされ、中には失意のうちに逝去した者もいた。

しかし、そのような状況にあっても京劇は生き続けた。共産党が、民衆が模範とするべき劇として、京劇役者が演じる、今の現代京劇を作成したのである。当時の民衆は娯楽の少ない中のこの京劇に熱中した。さらに喜ばしいことに、この現代京劇というものは非常にクオリティが高く、今も人気の京劇の一つである（無論、今の中国人が現代京劇に熱中していたり、模範にしたりしているわけではない）。

文化大革命が終焉を迎えると、京劇は復活した。演目は再び上演され、役者は再び尊ばれ、いまや中国の伝統演劇の代表となっている。ただ悲しいことは、京劇よりも面白い娯楽の

登場により、京劇の人気は最盛期に遠く及ばないことである。

二、日本人と京劇

日本人と京劇の関係は、決して浅いものではない。当然オペラのように今の生活に密着するほどではないが、調べると案外交流があったりする。

日中戦争前後において、京劇が訪日公演されたことも、歌舞伎が訪中公演されたことも一度や二度ではない。

最も有名な例は梅蘭芳による来日公演であろう。彼は1919年、1924年、1956年と三度にわたって来日し、そのたびに京劇ブームを巻き起こしたという。その足跡と言ってはなんだが、日本の辞書「広辞苑」には「梅蘭芳」という語が記載されている（第六版確認済み）。この読みは音読みの「バイランホウ」ではなく、中国語に近い「メイランファン」である。中国人名でそういう読みをされる人は非常に少なく、当時の紹介のされ方、そしてそれを日本人の記憶に染み付けた京劇の魅力がうかがえる。

また最近では中国の京劇院の来日公演が年に1、2回ほどおこなわれる。私も2017年6月に天津京劇院の来日公演を見に行った。そのほか日本人京劇俳優も存在し、在日京劇団新潮劇院のほか、特に石山雄太は中国国家京劇院初の外国人俳優として活躍されている。

三、結論

日本人に京劇を広める方法を考えた結果、以下のものにたどり着いた。

①日本における京劇公演の追加

最も京劇に触れる簡単な方法は、やはり観劇であろう。現在日本での公演回数は決して多くなく、その触れる機会自体が少ない。中国の京劇団の来日公演は年に一回程度であり、在日京劇団の公演も調べた限り多くは行われていない。この回数を増やすことで日本人の京劇に触れる回数が増やすことができ、日本人への京劇普及が成功する可能性がある。

②SNS等インターネット上での露出の増加

日本語での京劇のインターネット上の露出は非常に少ない。書籍、新潮劇院のホームページなど一部を除けば、YouTubeやTwitter、Instagramなど多くの人に利用されている媒体における京劇関連の情報はほぼ中国語であり、京劇に興味を持ち始めた日本人にとっては、とても良い環境とは言えない。これは①による「露出するイベントがない」というのも原因といえる。

ここで、仮に現在存在しない新潮劇院のツイッターなどの公式アカウントを何かしらにひらいたとしよう。こうすることで情報の拡散能力にたけたインターネットによって、今まで以上に正確な情報が出回りやすくなる。

③日本文化とのコラボレーション

すでに行われてはいるが、私はさらなる日本文化とのコラボレーションを提案する。

日本に存在する数多くの伝統文化と、京劇がコラボレーションすることによって、どちらの世界にも、一方のファンが足を踏み入れることができる。これは双方の「伝統文化の保存」という面における大きなメリットであり、例えば歌舞伎などとコラボレーションすることで、大々的に宣伝されることが予想される。このことは私が目的に掲げた「京劇の普及」にも一役買ってくれることと思われる。

また、それは「集客が可能なのか」という疑問を抱く方もいるかと思うが、新潮劇院では過去に2度、能楽とのコラボレーションがされており、また2010年には歌舞伎役者の5代目坂東玉三郎が同じく中国の伝統演劇である崑曲とコラボレーションした。いずれの時も好評であったことから、その心配は無用であると考えられる。

④日本の学校への巡回公演

私は、日本の小、中、高等学校への巡回公演を提案する。

なぜこのような提案をするかというと、2017年、新潮劇院により、ヨコハマアートサイト採択の学校巡業が催され、成功を収めているからである。また、小、中学生という非常に若い世代に対して京劇が知られるというのは、日本での京劇役者育成の成功の可能性も大いに上がる。なぜなら、京劇をやるのにまだ体が柔らかい年少から始めるのは大きなメ

リットだからである。かつて、京劇役者は、小学生以下ほどの年齢のころから俳優育成機関である科班に属し、俗に「七年の大獄」と呼ばれるおよそ7年間の厳しい修行を乗り越えてなるものであった。映画「霸王別姫（邦題『さらば、わが愛 霸王別姫』）」の中でも、主人公が所属した科班で、文字通り血のにじむような修行をするシーンがある。その時の基礎訓練が、柔軟性と身体的なバランス感覚などを養うものなのである。

また、若者に中国の伝統芸能に触れる機会が与えられるのもうれしい。

4 文献

インターネット

① 「京劇城 京劇の歴史と特徴」 <http://www.geocities.jp/cato1963/KGHistory.html>

② 「新潮劇院ホームページ」 <http://www.shincyo.com/>

③ 「民主音楽協会 京劇」 <http://www.min-on.or.jp/andmore/kyogeki.html>

④ 「京劇 楽戲舎」 <http://www.rakugi.net/tanoshimo.html>

アクセス日

① 2017年5月19日 ②2017年4月21日 ③2017年4月21日 ④2017年4月21日

書籍

「京劇役者が語る 京劇入門」 著・魯大鳴（2002）中央公論新社

「京劇『政治の国』の俳優群像」 著・加藤徹（2012）駿河台出版社